

# 幼稚園と小学校の交流活動に関する一考察

A Study of Exchange Activities among Kindergartens and Elementary Schools

|                 |               |                  |
|-----------------|---------------|------------------|
| 西 出 勉           | 亀 山 比 佐       | 笹 山 雅 司          |
| Tsutomu NISHIDE | Hisa KAMEYAMA | Masashi SASAYAMA |

北翔大学教育文化学部研究紀要  
第4号 2019

# 幼稚園と小学校の交流活動に関する一考察

## A Study of Exchange Activities among Kindergartens and Elementary Schools

西 出 勉 亀 山 比 佐<sup>1</sup> 笹 山 雅 司<sup>2</sup>  
Tsutomu NISHIDE Hisa KAMEYAMA Masashi SASAYAMA

### 1 はじめに

新幼稚園教育要領<sup>(1)</sup>及び新小学校学習指導要領<sup>(2)</sup>は平成29年3月に告示され、小学校については平成32年度の完全実施に向けて各学校ではその準備ための移行期間に入っている。新小学校学習指導要領第1章総則<sup>(3)</sup>においては学校段階等間の接続が提起され、従来にも増して幼児期の教育の接続と低学年における教育全体の充実が叫ばれている。

本研究では長年、継続的に取り組まれてきた札幌市立もいわ幼稚園と札幌市立藻岩南小学校の交流活動の実践事例を取り上げ、その交流活動の指導計画や実践の特色、2年間弱に渡る活動の推進に向けた園長及び校長のリーダー行動の特質について述べていく。

### 2 研究の目的

もいわ幼稚園及び藻岩南小学校における交流活動の実践事例を通して、交流活動の指導計画や実践の特色、交流活動に対する園長及び校長のリーダー行動等について明らかにすることを目的とする。

### 3 研究の内容

- (1) 交流活動に関する指導計画及び実践の特色について分析する。
- (2) 交流活動の推進に向けた園長及び校長のリーダー行動等について分析する。

### 4 研究の方法

- (1) 実践資料（指導計画や写真等）の収集

---

1 北翔大学非常勤講師  
2 札幌市立もいわ幼稚園園長

- (2) フィールドワークによる参与観察  
 (3) 半構造化自由回答法による面接調査（インタビュー調査）

## 5 実践事例について

### (1) 交流計画（指導計画）について

本事例における交流活動は、①「4歳児と2年生の交流」及び②「5歳児と4年生の交流」の2つの交流形態により実践が積み重ねられてきた。

#### 【① 4歳児と2年生の交流計画】

①に関する交流回数は年6回予定されており、小学校の2名の学級担任が、学校行事の時期と幼小交流の時期が重ならないように配慮しながら交流計画を立案している。また、交流活動に配当する授業時数については、全て生活科の教科時数を充て教育課程を編成している。

【表1 4歳児と2年生の交流計画】

#### <交流の目標>

| 小 学 校                  | 幼 稚 園               |
|------------------------|---------------------|
| ・相手を思いやり、自分から行動しようとする。 | ・2年生や小学校に憧れや親しみをもつ。 |

#### <交流計画（抜粋）>

| 指導時間<br>指導について       | 指導日<br>場所  | 小学校（2年生）   |   |   | 幼稚園（4歳児）  |   |  |
|----------------------|--|--|---|---|---|---|--|
|                      |  | ねらい<br>学習活動  | 指導ポイント  | 教師の支援<br>配慮事項   | ねらい<br>活動内容   | 指導ポイント  | 環境構成<br>配慮事項   |
| 3H/6H<br>第3回目の<br>交流 | 2017<br>7/18（火）<br>10:40～<br>13:00<br>小学校視<br>聴覚室<br>体育館 | ねらい<br>・学んだことを生<br>かしてうさぎ組に<br>ペープサートを見<br>せる。<br>学習活動<br>○2年生が「ス<br>イミー」のペープ<br>サートを行い、4<br>歳児に見せる。<br>○じゃんけん列車<br>○一緒に給食・弁<br>当を食べる。 | ・今まで考えたこ<br>とを取り入れて、<br>意欲的に見せるこ<br>とができるように<br>する。 | ・幼児にも伝わる<br>ような読み聞かせ<br>の仕方考えられ<br>るように投げかけ<br>る。<br>・自信をもって読<br>み聞かせている姿<br>を認めていく。                | ねらい<br>・2年生との再会<br>を喜び、親しみを<br>深める。<br>活動内容<br>○2年生から「ス<br>イミー」のペープ<br>サートを見せても<br>らう。<br>○じゃんけん汽車<br>○一緒に弁当を食<br>べる。   | ・2年生がやって<br>くれるペープサー<br>ト「スイミー」に<br>興味をもてるよう<br>にする。<br>・一緒にお弁当を<br>食べることで園児<br>の思いを実現でき<br>るように支える。                  | ・事前に「スイ<br>ミー」の絵本を読<br>み聞かせておく。<br>・事後に、保育で<br>「ペープサートを<br>使った遊び」を楽<br>しめるように投げ<br>かける。<br>・「一緒に弁当を<br>食べたい」という<br>園児の声を学校に<br>知らせ、実現でき<br>るようにする。 |
| 4H/6H<br>第4回目の<br>交流 | 2017<br>10/25（水）<br>10:30～<br>11:30<br>小学校<br>視聴覚室       | ねらい<br>・うさぎ組を招待<br>する意識をもち、<br>自分たちで取り組<br>もうとする。<br>学習活動<br>○ジャガイモを一<br>緒に食べる。<br>○「おひさまにな<br>りたい」を一緒に<br>歌う。                         | ・自分たちで考え<br>たことに主体的に<br>取り組めるように<br>する。             | ・うさぎ組が喜ん<br>でくれる方法を考<br>えられるように投<br>げかける。<br>・自分たちの気づ<br>きを基に会を進行<br>したり、幼児に関<br>わったりできるよ<br>うに支える。 | ねらい<br>・一緒にジャガイ<br>モを食べ、2年生<br>との再会を喜ぶ。<br>活動内容<br>○ジャガイモを一<br>緒に食べる。<br>○「おひさまにな<br>りたい」を一緒に<br>歌う。<br>＊小学校のパー<br>ティー会場の廊下<br>や教室に飾って<br>あった輪飾りやお<br>花、折り紙をたく<br>さんもらってきた。 | ・飾りつけやジャ<br>ガイモをふかすな<br>ど2年生が準備し<br>てくれたことに気<br>付いたり、喜んだ<br>りできるようにす<br>る。<br>・2年生と一緒に<br>楽しく食べること<br>ができるように支<br>える。 | ・2年生が協力し<br>て考え、準備して<br>くれたことを言葉<br>にして幼児に伝え<br>る。<br>・「お礼にサーカ<br>スショーを見せたい」という幼児の<br>考えを2年生に伝<br>え、実現できるよ<br>うにする。                                |

|                      |   |   |                               |                               |   |  |  |
|----------------------|---|---|-------------------------------|-------------------------------|---|--|--|
| 5H/6H<br>第4回目<br>の交流 | 2017<br>11/6(水)<br>10:20～<br>10:40<br>小学校<br>視聴覚室 | ○うさぎ組と小学<br>校のグラウンドで<br>待ち合わせをして<br>遊ぶ。     | ・ペアの幼児に声<br>をかけて遊べるよ<br>うにする。 | ・ペアの幼児と何<br>をして遊ぶかを考<br>えさせる。 | ○翌日の招待状を<br>小学校中休みの時<br>間にグラウンドで<br>待ち合わせをして<br>持っていく。  | ・翌日の交流に期<br>待をもって関われ<br>るように言葉をか<br>ける。  | ・2年生にしても<br>らったことを思い<br>出すようにし、期<br>待をもって準備で<br>きるように支える。<br>・ステージに飾り<br>つけをしたりして<br>劇遊びなどを見て<br>もらったりできる<br>ように園児と共に<br>準備する。   |
| 事後指導                 | 2017<br>11/7(火)<br>10:30～<br>11:40<br>幼稚園         | うさぎ組から招待<br>されて劇ごっこと<br>サーカスショーを<br>見せてもらう。 |                               |                               | ・ジャガイモパ<br>ティーのお礼に2<br>年生を幼稚園に招<br>待し、劇ごっこと<br>サーカスショーを<br>見せた。<br>○劇ごっこ<br>「ねずみの嫁入り」<br>○サーカスショー<br>なわとび、フラフ<br>ープ、こま、とび箱、<br>鉄棒、たたかい、<br>きつねがきつねう<br>どんを食べる | ・自分たちが準備<br>してきたことがで<br>きるように確認し<br>たり、励ましたり<br>する。<br>・2年生に喜んで<br>もらえたことを分<br>かりやすく伝え、<br>招待してよかった<br>という思いがもて<br>るようにする。 | ・ステージを飾り<br>つけたり、発表の<br>準備をしたりしな<br>がら、一人一人が<br>自信をもって張り<br>切って発表できる<br>ように、言葉をか<br>けていく。<br>・2年生がしてく<br>れたように飾りを<br>もち帰ることがで<br>きるよう、子ども<br>の思いを受け止め<br>た援助を心がけ<br>る。 |

小学校では交流活動の目標を「相手を思いやり、自分から行動する」とし交流を進めている。

2名の学級担任は「2年生から発信していこう。」という共通の思いに立って計画を立て、前述のように交流活動の授業時数は全て生活科の教科時数を充てている。また、国語科の学習で行った「スイミー」のペープサートを、当日の交流活動において幼児に向けて披露するなど、合科的な指導を取り入れながら発達や学びの連続性を意識した活動に取り組んでいるところにある特色がある。また、各学級では児童と話し合いを行い、交流に対する児童の思いを実現するように取り組んでいる。学級担任は毎回の交流活動の話し合いについて、交流が近づいたタイミングで学年打ち合わせを適宜設定して、内容の充実を図ろうと考えていた。また、交流ごとにメールで幼稚園の担任と細かな打ち合わせを行い、活動に向けた幼小の共通理解を図るようにしている。事前指導は、毎回の交流に1～2コマの割り当てで行っていた。

2年生は1組、2組共に18名の児童数であり、幼稚園の幼児1人におよそ2人の2年生がペアとなって活動を展開している。交流前に行う2年生と4歳児のグルーピング（組合せ）については、事前に幼稚園の担任から関わりに配慮がいる幼児について連絡や説明を受け、スムーズな活動展開へ向けたきめ細かな対応を心がけている。2年生もそれぞれの学級に困りをもっている児童がいたため、幼稚園の担任ともよく話し合った。また、児童たちが幼児への関わり方について話し合う中で、落ち着いた幼児に対しては「一緒にお話を聞こうと言ってあげる。」緊張している幼児には「笑顔いっぱいに話しかける。」など自然に意見交流が起きており、幼児の立場に立った思いやりのある言葉がけや行動が見られた。

事後指導については、休み時間の交流回数等に配慮が見られた。実施した交流日と次回の交流日の間が1か月から2か月も空いてしまうと、ペアになっている幼児の顔を忘れてしまった

り、関係が薄まってしまったりすることが考えられたため、休み時間の交流を4回行っている。交流のテーマを「遊具であそぼう」と題して、小学校のグラウンドや幼稚園の園庭でペアの幼児と遊ぶ機会を設けた。このように、ペアの幼児への思いや交流した時の楽しい思い出を次の交流に繋げていったところに特色が見られる。

幼稚園では表2の第3回目の交流（3H/6H）において2年生が演じてくれた「スイミー」のペープサートに関心がもてるように、学級担任が事前の取組として「スイミー」の絵本を読んでいた。また、「一緒にご飯を食べたい。」という幼児の思いを生かして、幼稚園の学級担任が小学校に提案し、協力を働きかけていた。

幼稚園の活動の中で特徴的な点は、交流後に幼児が2年生を「サーカスショー」に招待した事後活動である。表2の第4回目の交流（4H/6H）で、2年生がジャガイモパーティーに招待してくれた後に、幼児がお礼に「サーカスショー」に招待したことである。幼児は「2年生に喜んでもらいたい。」と劇ごっこ「ねずみの嫁入り」と「サーカスショー」を2年生に披露をした。【あしたも続きをしたいな】



サーカスショーでは、縄跳びやとび箱を跳んだり、フラフープやこまの技を披露したりした。2年生からもらった飾りを真似て作った輪飾りやお花でホールを飾り、自分たちができる最高の技を披露するなど、2年生の頑張りに自分たちも頑張って応えたのである。2年生の活動が園児の感性や表現力に刺激を与えて、幼児たちが、「サーカスショー」と「劇ごっこ」という創造的な活動に取り組んだと思われる。



一般的に保育のプロセス<sup>(4)</sup>

は、最初に幼児の姿や思いや願いをふまえながら、その実現に向けて保育者は環境の構成や幼児への関わりを考えていく。2

【つなげたら長くなったよ】 【サーカスショーに来てね】 年生が中心に組み立てた交流活動を通して、幼稚園の学級担任は幼児の興味・関心や憧れの気持ちや喜びを実感している姿から事後指導に繋げ、幼児の活動に広がりや深まりをもたせるよう環境の構成やその後のテーマ設定を考えている。幼小の発達や学びの連続性を意図しながら、幼児の憧れの気持ちを具体的な交流活動として展開していったところに大きな価値があるのではないだろうか。改めて「憧れは力になる」を実感した次第である。

### 【5歳児と4年生の交流計画について】

②に関する交流回数は年4回予定されており、小学校の2名の学級担任が、学校行事の時期と幼小交流の時期が重ならないように配慮しながら交流計画を企画している。幼小交流の授業時数は基本的には総合的な学習の時間の授業時数を充てている。しかし、交流準備の時数を含

めると総合的な学習の時間の時数だけでは児童が十分に活動することは難しく、事前準備にかける時数の確保が必要な状況であった。そこで、交流内容を考えた上で教育課程全体を見直し、合科・関連的な指導の考え方を取り入れながら教科時数や単元内容を決めて交流活動を進めている。

【表2 5歳児と4年生の交流計画】

＜交流の目標＞

| 小 学 校                 | 幼 稚 園   |
|-----------------------|---|
| ・コミュニケーション能力や企画力を高める。 | ・小学校や4年生に親しみをもって関わり、憧れの気持ちをもつ。<br>・小学校の先生に親しみ、安心感をもつ。 |

＜交流計画（抜粋）＞

|                    |   | 小学校（4年生）  |  |                   | 幼稚園（5歳児）   |  |   |
|--------------------|---|---|--|-------------------|--|--|---|
| 指導時間<br>指導について     | 指導日<br>場所   | ねらい<br>学習活動   | 指導ポイント   | 教師の支援<br>配慮事項     | ねらい<br>活動内容  | 指導ポイント   | 環境構成<br>配慮事項  |
| 中休み<br>・事前<br>指導   | 2017<br>10月                                       | ○中休み時間や昼休み時間を利用して、各学級4名選出された8名の実行委員が中心となってビデオレターを制作した。  |  |                   |  |  |   |
| 中休み<br>・事前<br>指導   | 2017<br>10月                                       | ○きりん組にビデオレターを送り、次の交流活動を紹介する。<br>・園児に交流を楽しみにしてもらう。   |  |                   | ○4年生から次の活動を紹介するビデオレターをもらい、交流を楽しみに待つ。   | ・次の交流への期待がもてるように言葉を掛ける。  | ・ビデオレターを見ることで、交流への期待感を高める。  |
| 国語と図工との合科<br>・事前準備 | 2017<br>10月                                       | ○園児が制作できそうで、楽しめそうな折り紙や工作の作品を図書室で探す。   | ・簡単に作れて、楽しめる作品であるかどうかを考えさせる。   | 「ごみが出ない遊び」を考えさせた。 |  |  |   |
| ・担任<br>同士の打ち合わせ    | 2017<br>10/13<br>15:00～<br>小学校                    | ○交流内容の確認<br>○関わり方に配慮する園児について<br>○当日の持ち物について<br>○開始・終了時刻の確認  |  |                   | ○4年生の各グループで考えている遊びの内容について聞く。<br>○制作活動では、言葉だけの説明では理解が難しいので、実際に見せてもらった方が分かりやすいことを伝える。  |  |   |
| 3H/4H<br>第3回目の交流   | 2017<br>10/18（水）<br>10:30～<br>12:00<br>小学校<br>体育館 | ねらい<br>・園児と共に楽しめる遊びを計画し、楽しむ。<br>・ベアの園児をリードしながら、折り紙を完成させる。<br>学習活動<br>○触れ合い遊び<br>「お買い物に行こうよ」<br>○各グループに分かれて4つぐらの遊びをする。<br>（折り紙、糸電話、ピョンピョンがえる、魚釣り、俵転がし、紙玉バスケット、ふくらむ人形、ストローグライダー、ひらひら、ボーリング、輪投げ、紙飛行機、カメラ作り、まと当て、牛乳パックカエル、手作りめんこ、とんとん相撲、ポリ袋風船、コップ飛行機、切り紙、紙皿工作<br>○踊り「シェアワールド」を見せた後、幼児に踊りを教える。<br>○「世界中のこどもたちが」と一緒に歌う。 | ・幼児の様子を見たり、考えたりしながら、進めるようにする。<br>・子どもたちの創意工夫を引き出し、自主的に行動できるようにする<br>・幼稚園の子どもたちの様子を見て、関わり方を考えながら進めるようにする。 |                   | ねらい<br>・小学校で安心して過ごし、4年生に親しみをもって関わる。<br>・4年生にあこがれの気持ちを持ち、自分でもやってみようとする。<br>活動内容<br>○各グループに分かれて4つぐらの遊びをする。<br>（折り紙、糸電話、ピョンピョンカエル、魚釣り、俵転がし、紙玉バスケット、ふくらむ人形、ストローグライダー、ひらひら、ボーリング、輪投げ、紙飛行機、カメラ作り、まと当て、牛乳パックカエル、手作りめんこ、とんとん相撲、ポリ袋風船、コップ飛行機、切り紙、紙皿工作<br>○踊り「シェアワールド」を4年生に教えてもらう。<br>○「世界中のこどもたちが」の歌を披露した後、一緒に歌う。 | ・ベアの4年生との遊びを楽しんでいるかを観察する。<br>・遊びのルールや作り方が、4年生の説明だけで理解できているかを観察し、できているところは自分でする。分からないところは個別に対応する。 | ・ベアの4年生を意識できるように、事前に声をかけて確認する。<br>・グループの遊びから抜けている幼児が楽しめるように見通し援助する。<br>・遊びのルールの説明を聞いても理解できていない幼児への声掛けをする。 |



4学年は2学級編成であり、2名の学級担任は学年打合せや朝の打合せの時間を活用しながら、何度も話し合いを重ねてきている。「コミュニケーション能力や企画力を高める」という目標に向かって、時数を確保しつつ児童の思いを尊重した活動内容を組み立て、できるだけ子どもたちが自主的かつ意欲的に探究活動に取り組めるよう工夫するようにしている。例えば表2にある第3回目の交流(3H/4H)では、児童が幼児と共に折り紙の作品などを制作するため、事前に幼児が作れそうな作品を4年生自身が図書室で調べて自己決定するなど意欲的に活動する姿が見られた。本活動は、国語科や図工科の教科を組合せ時数を確保するなど、教育課程全体を見通した交流カリキュラムを組むようにしているところに特色がある。また、幼小双方の子どもたちの意欲が高かったことから、各学級4名で学年8名の実行委員会を組織して、交流会の司会やビデオ制作などに携わらせている。第3回の交流会の前には、実行委員会の児童が中休みを利用して、工作や折り紙の作品を作り、その作品で遊んでいるところをビデオ制作し、できたビデオを届けに行くなど、積極的に取り組む姿が見られた。この活動は学級担任が直接的に関わって取り組まれたものではなく、児童自身がシナリオを作成し、自分たちが実演して録画したものである。幼児たちがわくわくしながら交流日を待ち望む気持ちを大事にし、さらにその思いが持続されて膨らむような活動につながっている。一連の交流活動を展開するに当たっては、小学校と幼稚園の担任同士は交流日に向けた事前打合せを毎回行っており、小学校では1回の交流ごとに準備時間を2～3時間は確保している。交流計画表には表れていない時数を小学校の担任から聞き取ったことをもとにしてまとめたものが表2である。



【カエルをつくりたいな】

2017年7月11日が第1回目の交流日であるが、小学校の児童は、交流を始める前に幼稚園の5歳児の担任から「幼稚園は遊びが勉強」というテーマでレクチャーを受けている。また、日を改めて担任同士が事前の打ち合わせを行い、関わりに配慮が必要な児童について説明や連絡をし合ってグルーピング(組み合わせ)について考えたり、小学校と幼稚園がそれぞれで行っている遊びや歌や踊りについての情報を交換したりして、すぐにできそうな触れ合い遊びを選ぶなどしている。交流内容については各学級で話し合い、児童から出された意見を実現するように取り組んでいた。また、幼児1名に対して2名の児童がペアとして関わり、交流活動を展開している。交流をしていく中で、児童の中には幼児との関わり方についての困りもあったが、児童同士で話し合って解決している。教員は子どもたちのつぶやきを聞くことはあったが、具



【回すよ、見ていてね】

体的な解決方法について指導することはなかったそうである。子どもたちが交流を重ねるごとに園児について理解を深め、優しい気持ちで接していくことで困りを乗り越えていったのではないかと考えられる。

4年生の交流活動は、事前準備に特色が見られる。4年生は自分たちの思いを実現するためにたくさんの意見交流を行いな

がら主体的に活動している。また、その思いに応えようと学級担任も関わり、子どもたちを育てていこうという意識で交流活動を見守っている。実際に4年生ときりん組（5歳児）の遊びの場面を体育館で見学したが、遊びのルールも幼児の実態に応じて作り変えるなど柔軟性があり、当日は幼児の様子に応じて声かけをするなど意欲的に活動していた。交流活動がスムーズに進行するように、グループでの話し合いや事前準備にも多くの時間が割かれたのではないかとと思われる。

幼稚園では、学級担任が小学校で覚えてきたゲームをしてみたり、折り紙を折ってみたりする姿を見せながら、事前に幼児がグループでの遊びに対応できるように関わりながら支援している。4年生と遊びながらルールについて知り、ゲーム自体の楽しさに気付く様子が園児には見られたのではないだろうか。本年11月6日（火）に行われた札幌市南区の幼保小連携推進協議会では、もいわ幼稚園の公開保育を参観させてもらった。そこでは、きりん組（5歳児）がサッカーのルールについて話し合っている様子が見られ、他園の先生方は驚きをもって参観していた。4年生との交流を通して、「ルール」について知ったり、考えたり、話し合ったりする力が少しずつ育成されてきたのではないだろうか。4年生の姿に接し、幼児の適度に背伸びして活動したいという気持ちが、成長への力になっているのではないかと考える。

## 6 園長・校長の認識とリーダー行動について

本事例におけるもいわ幼稚園長（以下、園長と呼ぶ）及び藻岩南小学校長（以下、校長と呼ぶ）は、2年前、当該園・校に同時に赴任され、交流活動の実際について取り組んできた。園長及び校長が交流活動の推進に当たって、どのような認識のもとにリーダーとして取り組まれてきたのかについて、インタビュー調査を行った。

### （1）園長のリーダー行動について

#### 【園長の認識】

#### <交流活動の実際> ～ グループिंग、記録化と教員の学び合い（写真の活用）

- ① 交流活動について考える場合、幼児と児童のグループング（ペアリング）、組み合わせを大切にしている。年間の活動を通してできるだけ同じペアで交流し、信頼関係を築きながら交流活動の質を高めようと考えている。小学校サイドでは、グループングを考えながら先を見通した交流計画づくりをしており、そこには小学校なりのPDCAが意識されていると考えられる。
- ② 交流活動の内容については、歌や踊り、ゲームを中心に構成し、活動する時期に応じて季節感や園行事を大切にしながら取り組んでいる。活動のプロセスの中で遊びや学習のルールが意識され、子ども同士がかかわっている姿が見られるようになってきた。

#### <幼児・児童の変容（成長プロセス）> ～ 「意欲化」と「学びの積み重ね」

- ③ 幼児は交流活動を通して、「おもしろかった！」という感覚を積み重ねながら、4年



生に「あこがれて、やってみたい！」という気持ちをもつようになる。やがて自分は4年生と「同じことができた。」「自分がちょっぴり背伸びしてできた！」という気持ちが芽生え、次なる活動への意欲となってつながっていく。連携活動を通した幼児の学びのプロセスと考えられる。

- ④ 昨年度、最後の交流活動の際に4年生が年長児に歌を聴かせてくれた。その歌声に幼稚園児は大変感激し、自分たちも歌う番になった。年長児は4年生の歌声を聴いたことで歌い方が明らかに変わり、とてもよい響きの歌声となった。幼稚園の先生方は、その幼児の姿と歌声を聴いて感激していた。交流活動が生んだ、交流活動の中で育まれた子どもたちの姿であると考えている。
- ⑤ 幼小の交流活動は2年生と4年生が対象であるが、2年生の児童は4年生になったら再び交流することができるという期待をもっている。また、幼稚園児も小学校に入学する児童数が比較的多いことから、気持ちや意識の中でのつながりが感じられるのではないだろうか。

#### <子どもの姿と学級担任の認識> ～ 園内研修へのアプローチ

- ⑥ 「交流は生ものである！」(活動の基本は変わらないが…)先に交流活動の計画があるのではなく、子どもの様子によって取組内容は変わっていくものである。その中で子どもが変容していく姿を見て、先生方は「交流をやってみてよかった。」という満足感や成就感をもつようになる。子どもが成長している姿を他の先生にも伝えて、やってみて、「確かにそうだ！」という確信が、次の交流活動に生かされるようになる。先生方も自分の感じ方や考え方を確かめたいという気持ちがあるのではないだろうか。
- ⑦ 日々の交流活動や1年間の活動を必ず写真等により記録として残すとともに、活動後の振り返りに向けたイメージづくり(リマインダー)などに記録写真を活用するようにしている。
- ⑧ 幼稚園では2～3週間に一度、園全体で保育の打合せを持つようにしている。日々の保育や交流活動のねらい(目標)や見通し、先生方の遊びに対する見方・考え方について肯定的に捉えながら、園長自らの見方や考え方について伝えるようにしている。幼児の具体的な遊びの場面を通して、保育の意味付け、価値付けをするようにしている。

#### 【分析と考察】

##### (1) 交流活動の内容と方法 ～ 「柔軟性」と「グルーピング」

園長は交流活動についてプログラム構成の柔軟性と幼児・児童のグルーピングを重視している。

プログラム構成の際には年間指導計画を基本としながらも毎年、幼小の担任同士による話し合いで大まかな年間日程等の計画を立て、毎回の反省と次回に向けた話し合いを大切にしながら活動内容・方法を柔軟に変更することを推奨している。「『交流は生ものである！』(活動の基本は変わらないが…)先に交流活動の計画があるのではなく、子どもの様子によって内容は変わっていくものである。」との園長の信念が柔軟性を支えているものと考えられる。担当教

員が幼児・児童の具体的な姿をイメージしながら自ら活動プログラムを構成することにより、交流活動に対する当事者意識が芽生えとともに、活動の振り返りを通じた改善意欲の醸成が図られる。

また、園長は幼児と児童のペアを基本に、年間を通して計画的・継続的な活動を組み立てることを強調している。交流活動を実施すること自体も大切であるが、幼小の連携・接続の視点に立つとき、幼児と児童の継続的なかわりがどのような影響を与え、どんな学び合いが存在するのか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」<sup>(5)</sup>に象徴される育成したい姿や資質能力がどのように育まれているのか等、発達や学びの連続性に着目していくことが重要である。幼児・児童の計画的かつ継続的なグルーピングを通して、目の前にいる幼児・児童の日々の変容をあえて学びの連続性の視点から着目させようとする園長のアプローチは、幼小の教員同士の力量形成につなげようとするトップリーダーの戦略・戦術として興味深い。

## (2) 園内研修を戦略的な拠点とした園長のリーダーシップの発揮

前述のように園長は教員同士の力量形成を視野に入れているが、活動の振り返りの方法論として記録写真の活用をあげている。園長の取組では写真を効果的に用いた交流活動の記録であるドキュメンテーションの活用を積極的に行っているところに特色がある。

ドキュメンテーションの効果について、利根川<sup>(6)</sup>は次のように述べている。

- ① 参加メンバーにとって、「自分たちのやってきたこと」「やっていること」を振り返ることができる。
  - ② クラス内外の参加していないメンバーにとって、写真を中心としていることで活動の展開が分かり、途中からでも参加するきっかけとなる。
  - ③ クラス外の保育者にとって本園では全職員がすべての子どもを見るということで、クラスの枠にとらわれずに子ども同士、また子どもと保育者がかかわる機会も少なくない。
- ドキュメンテーションを目にすることにより、活動が共有され、話題が弾む、また、的確な対応ができる。

このように園長は交流活動におけるドキュメンテーションの活用を通して、教員同士の振り返りの場や機会を意図的に設定しながら、子どもの姿で語り合う教員同士の学び合いの場を意識的に構築している。この試みは教員の学び合いのプロセスを通して、交流活動の意義や内容等が再認識されるとともに、より効果的な活動へ向けた教員間の改善意欲の醸成にもつながるものと考えられる。保育の世界で活用されているドキュメンテーションの考え方は、今後、幼小の交流活動を分析する一つ的手段として、あるいは学び合う教員集団を形成する研修の方法論として有効であると考ええる。

また、本事例のようにトップリーダー自らが保育や交流活動の趣旨やねらい、具体的な内容、保育者のかかわり方等を語るアプローチは、園内研修を戦略的な拠点として教員集団の内発的改善意欲を引き出す園長の価値あるリーダー行動として捉えたい。

## (2) 校長のリーダー行動について

### 【校長の認識】

#### ＜担任主導の交流活動＞

- ① 2年目になって感じたことは、学級担任の努力に依存するような担任主導の活動計画であるということであった。そして、活動計画が教育課程にしっかり位置付いたものではなかった。

前年度の交流の引継や記録等が十分ではなく、2年目になって「組織で対応できる体制にしていきたい。」と全教職員に対して言い始めた。「交流活動の時間が設定されているのでやってきた。」このような状況について丁寧に振り返りやってこなかったから、学級担任が負担感をもつようになったのではないか。

- ② 小さな規模の学校だからこそ、しっかり教育課程に位置付け、学校全体として情報共有していく必要がある。引き継ぎ記録として残し、学校組織の問題として捉えていく必要があると考えている。改めて何をどのように組織として考えていかなければならないのか、問い直す必要にせまられた。

- ③ 当日の交流活動には学級担任以外に、もう一人サポートできる教員を位置付けたいと思った。教務主任の教員を担当させようと考えたが、授業の補欠への対応やPTAに関する業務、特別な配慮を要する児童への対応など、多種多様な業務を抱えていることから難しい状況であった。今後の教育課程をつくるためにも、自分が交流活動を見にいくようにした。

#### ＜トップリーダーの危機感＞

- ④ 次年度につながらない今年限りの担任主導の活動では、学級担任の負担感を増し、何も生まれないし、進まない。担任自身が子どもたちの喜んでいる姿を見て「やってよかった。」と思えるような交流活動が大切である。そのためには、それなりの目標をもって、しっかりと準備をしながら取り組まなければならない。担任個人の今年だけの活動に頼っているようでは、だめであると思う。校長としての危機感をもっている。

- ⑤ 自分が危機感をもった時、まず何から手をつけるか、優先順位を考えた。その際、校長が考える順位と学級担任等が考える優先順位には違いがあるのではないかと感じた。

また、やるからには目標を立てて計画的に実践し、担任一人に任せるのではなく、学校組織として「みんなでやっていく」という意識で臨みたいと考えた。

#### ＜実践資料の整理・記録化＞

- ⑥ 交流活動は長年、継続的に展開されてきたが、その歴史が見えていなかった。最初は見えていないのは校長だけかと思っていたが、実際には具体的な活動記録が資料として整理されていない状況であった。そのため前年度の活動が本年度の2年生及び4年生の交流活動にどのようにつながり、生かされているのかが見えなかった。

先生方には幼稚園との打合せや総合的な学習の時間の単元指導計画等をファイリング

するなど、今からでも遅くないから記録として資料を整理して残すようを伝えた。資料の積み重ねが、交流活動の見える化へつながると思った。

### 【校長の戦略・戦術】

#### ＜移行期間に伴う授業時数・学校行事の見直し＞

- ⑦ 新学習指導要領の完全実施に向けた移行期間であることから、授業時数の見直しや学校行事の精選について取り組むように考えた。教務主任（部長）は様々な業務が錯綜していたことから、幼小の交流活動（異校種間交流）は研究部、異学年交流については児童活動部の部長に授業時数や学校行事の在り方について検討することを伝えた。

教務主任にやらせた方がはやいのであるが、自分事として捉えてほしいという気持ちがあった。教務主任以外は学級を担当している部長であることから、「やがて自分も交流活動を担当する可能性がある。」と考えて、見直し案を自分事として捉え作成してくれると考えた。自分事の認識から作成した見直し案については、自覚と責任が生まれてくる。

- ⑧ 学校行事の精選については、部長や担任は「この行事はやめます。」とはなかなか言えないものである。校長が廃止することも含め行事の精選について伝えることにより、学校全体として組織的に取り組むことができる。今は安定した学校状況であるが、先生方は今までの経緯を考えてしまい、学校行事は廃止できないものという考え方が根底にあると考えられた。その意味で、校長が自ら決断し、行事の存続と廃止を進めていくことが必要である。

子どもたちは学校行事を通して育っていくが、働き方改革の流れの中、学校の教育活動について「意味あるものなのか、必要であるのか」を問い返す時代にきていると考えている。その延長線上として幼小の交流活動の取組も考えていく必要がある。

#### ＜ミドルリーダーの育成＞

- ⑨ 分掌部長のようなミドルリーダーに対しては、学校の中核として、参画意識をもって教育活動を活性化してほしいという願いを伝えるようにしている。昔はベテラン教員をリーダーとして位置付けたが、今は年齢に関係なく役職をお願いし、活躍する場を与えるようにしている。そして、全員に対しては感謝とねぎらいの気持ちで接するように心がけている。

#### ＜交流活動の価値付けとリーダー行動＞

- ⑩ 異校種間交流は今日的な課題であるが、これまでは幼稚園と小学校の引継ぎ作業など情報交換が主なものであった。幼稚園の年長児が小学校に入学すると、赤ちゃん扱いされる傾向にある。交流活動の姿だけではなく、日常の年長児の本当の姿を理解していくことが大切である。

現状では幼小が交流する意義や必要感が十分に共有されていないのではないかと。春に行う幼小の職員間の交流で「幼稚園の教育が小学校にどのようにつながっているのか。」「こんな力が求められ、必要とされている。」など、改めて交流活動の意味付け、価値付

けが重要である。

そのためには、校長が交流活動を実際に見学すること、参観を通して「校長自身が知る→かかわる→教職員へ伝える」というサイクルが必要であると感じる。活動を子どもの姿で語る時、教職員の活動に対する実感や理解・説得力が生まれる。

## 【分析と考察】

### （１）学級担任の個業性に依存した交流活動 ～ 組織化へのアプローチ

もいわ幼稚園と藻岩南小学校の交流活動は、約20年前から継続的に実践されてきている。

校長が赴任して最初に感じたことは、日々の交流活動がどちらかというを担当任せであるという認識であった。幼小連携の交流活動の実態は、どうしても幼稚園及び小学校の学年、学級担任が中心となって活動することが多く、その活動内容・方法は担任の発想を重視する一方、学校全体が情報を共有して組織的に取り組むことの困難さが見受けられる。

佐古<sup>(7)</sup>は「個業的な学校」について、次のように述べている。

個々の教員がそれぞれの担当や関心領域ごとに閉じて、すなわち自己完結的に、その範囲内で子どもに対するかかわり方等を考え実践する状態の学校を、ここでは個業的な学校ないし個業化した学校ということにしよう。

校長が「担任主導（学級担任の努力に依存する）の活動計画」と述べているように、その時々を担当教員による個人的な努力だけでは、交流活動に対する担当教員の負担感が増大し内発的改善意欲は高まっていかない。一貫して本事例における幼小交流活動の「組織化」を主張している校長の考え方は、個業的な学校組織に対する危機感を表したものとと言える。

また、校長の「担任主導」という言葉には、交流活動の意義やねらいの共有化が直接的にかかわってきた幼小の担当教員同士には共通理解が図られてきたかもしれないが、当該学年ではない他学年・学級の教職員の理解や学校全体としての共通認識までには至っていない現状が継続していることを意味しているものと考えられる。

幼稚園と小学校という学校組織同士が連携・協働するためには、活動の中核となる学級・学年担任 → ミドルリーダー（主任、分掌部長等）→ 全教職員（幼稚園・小学校という学校組織）へと「個業的な学校」から「組織的な学校」への転換を目指した段階的なアプローチが必要不可欠である。

### （２）校長の戦略と戦術

#### ① 実践資料の整理と情報の共有化 ～ 「記録の可視化」

長年継続されてきている交流活動ではあるが、校長はその活動記録が意図的・計画的に整理されてこなかったという認識であった。担当教員の努力に依存した交流活動は、活動自体は幼小担任間でその意義付けや価値付けが共有されていたものと考えられるが、幼小それぞれの学校内、学校組織として十分に理解されたものではなかったことが想像できる。

校長が打ち出した実践資料の整理とは、記録の可視化（見える化）を通して、幼小の全教職員が今、進められている自分たちの交流活動の状況や立ち位置を理解することをねらったもの



である。価値ある交流活動の歴史や実践を担当教員レベルの認識から学校組織レベルの認識へ引き上げようとしたトップリーダーの戦略・戦術として捉えることができる。活動記録を振り返ることを通して、交流活動に対する共通理解と納得感が教員集団の中に芽生えることにより、組織全体として次なる活動への改善意欲が醸成されるのである。

## ② 教育課程への位置付け ～ 振り返る場や機会の設定

「学級担任の負担感からは、何も生まれないし進まない。」「やってよかったと思える交流活動」「そのためには目標をもって、しっかりと準備する。」校長の危機感からは、交流活動に対する担任の成就感や満足感を大切にしながら、活動の目標と計画づくりを意識化させていきたいという思いや願いが伺える。また、校長は「まず、何から手をつけるのか、優先順位を考えた。」と述べている。交流活動の改善に向けて優先順位をつけて活動の重点化を図ろうとしているものである。

具体的な実践が単なる交流活動レベルから連携・接続を意識した組織的な活動へ転換していくためには、活動目標の共有化と活動計画の明確化、そして活動の重点化が校長のリーダーシップのもと展開される必要がある。授業時数の見直しや学校行事の精選は、改めて幼小の交流活動をふり返る場や機会となると共に、校長は教育課程への位置付けを通して、担任任せの実態解消や学校全体で異校種間交流について理解し取り組んでいこうという改善意欲や連携文化の形成を組織的に展開しようとしている。改めて本事例は、トップリーダーの価値ある戦略戦術として捉えることができる。

## ③ 見直しに向けた校長のリーダーシップ

校長は授業時数や学校行事の見直しについて、まず幼小の交流活動（異校種間交流）と「異学年交流」に着目し、改善・改革に向けた第一歩を踏み出そうとしている。その際には、教務部長は様々な業務が錯綜していたことから、幼小の交流活動（異校種間交流）は研究部、異学年交流については児童活動部の部長に見直し（案）の検討を指示している。長年、取り組まれてきた学校行事の経緯を踏まえ、校長自らが行事の存続と廃止を進めていくことを全教職員に伝え、大胆な見直しの実現を図るべくトップリーダーとしての勇気と決断をもって断行したものである。

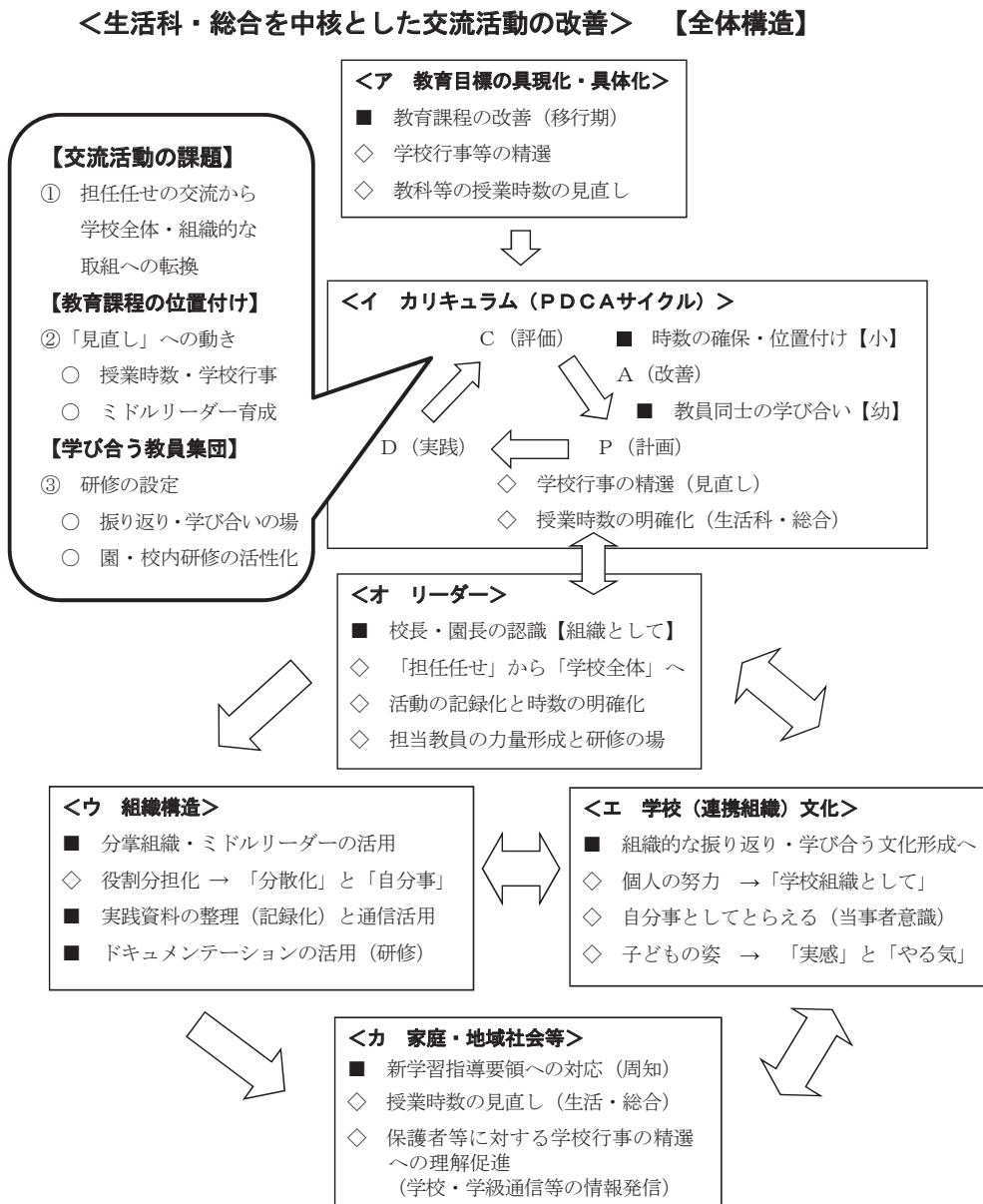
また、教務部長が中心となって検討するのではなく、研究部や児童活動部の部長に見直し（案）の検討を分散化しているところに特色がある。役割分担を明確にするとともに、見直し案を自分事として捉え作成することをねらいとしながら、ミドルリーダーとしての当事者意識を育成しようとする校長の分散型リーダーシップの発揮と見てとれる。校長は教務部長を将来、管理職を目指す人材として認識しており、学級担任をもたない専従教員として位置付けている。教務部以外の部長は今後、自分も交流活動の運営当事者になることが考えられることから、見直し案の作成に当たっても自分事として捉え、より具体的かつ実践的な改善プランを構築することを期待したのである。

分散型リーダーシップ・アプローチ<sup>(8)</sup>は、リーダーシップを組織現象として捉えた上で、組織の多様な状況において多様なリーダーが対話や人工物の活用などを通して対人影響力を行



使しようとするところに、その要諦がある。本事例のように校長が見直し（案）の検討に当たり、校務分掌を起点として各部長に役割を分担（分散化）し、かつリーダー同士による自分事としての対話の促進を仕掛けたことにより、校長が目指すところの学校全体としての組織的な取組や日々の教育実践に対する教員間の改善意欲の醸成につながるものと考えられる。

これまでの園長及び校長の戦略・戦術について、カリキュラムマネジメント・モデル<sup>(9)</sup>を援用し、交流活動の全体構造を示したものが図1である。



【図1 交流活動の改善に向けた全体構造（園長・校長の戦略・戦術）】

## 7 おわりに

これまで藻岩幼稚園と藻岩南小学校における交流活動の実際について記述してきたが、幼稚園側の当事者である園長として、本実践事例について若干の考え方を述べていきたい。

### ＜これから互いに育ち合うことのできる交流を目指して＞

本園では、20年程前の園舎改築時に、仮園舎が隣接する藻岩南小学校の校地内にあったことから日常的に小学生とかかわる機会があり、幼稚園との交流に関心のある先生が中心となり、人形劇、歌や合奏など様々な学年との交流をしてきた。その後10年程前から「2年生と年中4歳児」、「4年生と年長5歳児」が年数回交流することを互いの教育課程に位置付け、今でも実施されている。活動内容や回数・日程等は、その年の担任同士で打合せを行い、双方の実態やねらいに合わせて柔軟に行われている。

今年度の幼小交流の取組から感じることは、個性豊かな年中4歳児が2年生とペアでかわり回を重ねることで、自分が受け止められていることを感じて、安心してかわり遊んだり、交流後に一緒にした歌や踊り、遊びなどを自分たちでも再現したりする様子も見られている。昨年度、2年生と交流をした年長児は、4年生に関わることを楽しみにし、親しみをもって関わる様子が見られた。園に来てもらった時には、自分たちの遊びを紹介して一緒に楽しみ、最後のリレーでは、走る速さなどで憧れの気持ちが高まっていた。11月の交流では、5つのグループに分かれ、ブーメランや竹とんぼ等を一緒に作り、何度も飛ばしてみ、よく飛ぶように改良するなど、より密にかかわり合う姿が見られた。その様子を、校長先生と見ながら、以下のように交流を通した豊かな関わりによって、豊かな心が育まれていることを分かち合った。

- 小学生の園児に寄り添った優しいかわりが、園児同士のかかわりにも見られている！
- 特に年長児の小学校生活へのあこがれ・期待する気持ちが醸成されていく！

これらの豊かな体験は、いろいろな人と関わる中で、安心して自分を出したり、受け止めたりする心地よい経験となり、生きる力の土台を育むことにつながっていると感じる。また、自己肯定感を高め、遊びや学習への意欲等につながっているなど、双方にとって大きなメリットがあることを改めて感じた。今後、継続していきながら、子どもたちを取り巻く地域全体が子どもたちを受け止めて、「育てていく文化」が創られていくよう取り組んでいきたい。



【気持ちを合わせてジャンプ！】



【優しいまなざしの小学生】



【ブーメラン、こう作るんだ】

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、インタビュー調査にご快諾いただき様々な視点からご指導いただきました札幌市立藻岩南小学校の田中修校長先生にお礼申し上げます。また、交流活動の実際について、実践資料の提供や活動の様子をお聞かせくださいました札幌市立もいわ幼稚園及び札幌市立藻岩南小学校の教職員の皆様方に改めて感謝申し上げます。

※ なお、本論文については、次のように執筆を分担し記述した。

「5 実践事例について」…………… 亀山 比佐, 笹山 雅司

「6 園長・校長のリーダー行動について」…… 西出 勉

「7 おわりに」…………… 笹山 雅司

## <引用・参考文献>

- (1)「幼稚園教育要領」(平成29年3月)文部科学省
- (2)「小学校学習指導要領」(平成29年3月)文部科学省
- (3)「小学校学習指導要領 総則」(平成29年3月)文部科学省
- (4)「幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価」(平成22年7月改訂)文部科学省  
ぎょうせい 平成22年9月30日
- (5)「幼稚園教育要領 第1章総則第2」(平成29年3月)文部科学省
- (6)利根川彰博・中村章啓・小林明代著「保育におけるドキュメンテーションの活用」ななみ書房 2016年5月5日 P16
- (7)北神正行編著「『つながり』で創る学校経営」ぎょうせい 2011年10月20日 佐古秀一「第2章 個業と協働のマネジメント」P26
- (8)「講座 現代の教育経営3 教育経営学の研究動向」日本教育経営学会<編> 学文社  
2018年6月9日  
露口健司「第1部 学校の組織と経営 第2章 リーダーシップ研究の進展と今後の課題」  
P14
- (9)西出勉・亀山比佐「生活科等を中核とした幼小連携・接続の推進に関する一考察 ―カリキュラムマネジメント・モデル等の活用を通して―」『北翔大学短期大学部研究紀要』第56号 P111-P126